うたそら

第11号

2022 November 11

参加者一覧 …… 02

連作欄 8首の連作 自由詠 …… 03

テーマ詠欄「果物」 …… 18

一首評「そらよみ」 …… 22

短歌リレーコラム「望遠鏡」 …… 24

リレーエッセイ「いちごいちえ」 …… 26

次回予告・編集後記 …… 27

うたそら　第11号

発行：2022.11.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/

うたそら

ご参加いただいたみなさん（五十音順）

第11号

青糸りよ	@beanta0326
あき子	@ponko_san
麻倉ゆえ	@AsakuraYue
雨虎俊寛	@amefurashi3107
有村桔梗	@chattenoire_k
歩歩	@subjperf
池田竜男	@tankadragonman
石川順一	@Hitter57
一色凛夏	@88rinrin23
宇祖田都子	@Shinnsyutu2020
hs	@hswelt
江口美由紀	@miyuki_eguchi
海老沼夕	@3o1ZHnm5TsZnyki
えんどうけいこ	@clematisilica
大坪命樹	@OotsuboMeiju
音平まど	@andemonaihi16
歌島孟	@Sinn1990
歌眠	@kamin_plz
涸れ井戸	@kareido1111
河岸景都	@kate_kawagishi
北谷雪	@kitaya_misomiso
橘高なつめ	@coconutkikko
砧	
君村類	@kmmr_r09
熊谷聡子	@ataoka2lib1
くろだたけし	@tkuro2016
小泉キオ	@kiokoizumitanka
小泉夜雨	@kozumi_yau
坂中茱萸	@gumminocar
咲兵衛	@izumitakeishi
佐藤氷魚	@satohio_tanka
汐射ハルカ	@haru_c17h17cl2n
鹿ヶ谷街庵	@ikasamabakuchi
shino	@Shino_kaiki_t
西鎮	@xi_zhen_ivUT
雀來豆	@jacksbeans2
白石 夜花	@yohana_no_sekai
寿司村マイク	@xHksbNR4wv1wj8M
たえなかすず	@suzususzu2009
多香子	
高橋良	@takahashi_ry5
探偵とホットケーキ	@L_L_lawliet_
千原こはぎ	@kohagi_tw
つちとて	
ともえ夕夏	@croissant_hey_z
中村成志	@nakam8
奈瑠太	@nalda_aa
西淳子	@Jacky244Ray
西村曜	@nsmrakira
人魚の呪い	@yaotanka
ネコノカナエ	@nekonokanae_uta
薄荷。	@aie0himeco
早月くう	@k_hayatsuki
廣珍堂	@Hirochin_dos
笛地静恵	@Ymcx6rhjEZgwq
福山桃歌	@momoka_fukuyama
細川エリカ	@luvluvkasen
まさけ	@mskpompomfuwa23
マルメロ	
御糸さち	@MEATsachi
深影コトハ	@Cotoha_mikage
水沼朔太郎	@smizunuman
水せ	@m_iya_o
宮岡りょう	@myao_rrr
深山睦美	@57577_77575
虫武一俊	@mushitake
六浦筆の助	@Tohakumutun5057
六厩めれう	@mereumumai
村田一広	@mucci2022
森内詩紋	@NJq4oEvg5glcRpu
杜野詩季	@4kitanka55
矢野目知桂	
悠佳里	@yukari_rito
ゆりこ	@b7282e_akaneiro
龍翔	@oppizuntsuan

計75名

たくさんのご参加ありがとうございます！

今号のうたそら

第11号

参加歌人様……75名
連作欄……57名
テーマ詠欄…62名
一首評……8名

ご寄稿いただきありがとうございました！

コラム　江口美由紀さん
エッセイ　夜夜中さりとてさん

illustration: kohagi chihara

ご感想はこちらまで！ Twitterハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

第12号

連作欄 8首の連作 自由詠
テーマ詠欄「温」
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」

短歌募集

第12号 〆切 '22 12/31（土）24時
●8首の連作 自由詠　●テーマ詠「温」1首

第13号 〆切 '23 2/28（火）24時　＼2周年!!／
●8首の連作 自由詠　●テーマ詠「2」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
http://kohagiuta.com/utasora/

編集後記

外を歩くたび金木犀の香りがして、色づいた木々にせつなさと秋の深まりを感じる今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。風邪などひかれていませんか。

九月の末に、十八年をともに過ごした猫とのお別れを迎えました。しばらくは泣きっぱなしの日々でしたが、数日前にご縁があり、新しく保護猫を迎えました。前の猫を懐かしく想い出しながら、新しい子猫に振り回される秋となりそうです。

次号は年明け発行です。寒さが厳しい季節ですが、たくさんの温かですてきな作品をお待ちしております！

編集鳥　千原こはぎ

連作欄 8首の連作 自由詩

#うたそう

やさしさの定義

あき子

好きなのはふたたび香る金木犀、あなたのひだり胸のふくらみ
秋晴れの空は高くて最初からあきらめている　あきらめて、いる
それなりに見えればそうでほんとうにかなしいことを話せないまま
流れてる雰囲気でとどまっている晴天と雨のちょうど真ん中
話せないきもちはどこへ行くのでしょう　知るのがこわい　打ち消して、雨
ウソつきじゃなくて曖昧だっただけ濡れないように傘を咲かせた
この雨が止んでもどうせまた降るし、乾けと言ってくる風が嫌い
やさしさの定義みたいに落ちる雨　傷つきながら傷つけている

中崎町

雨虎俊寛

快速がビルやモールに番号が付いてる街へ徐行しだして
信号と空が青なら城崎へゆく約束を取りつけたのに
空襲を免れたらしい裏町の袋小路にレジ袋舞う
駄々っ子を置き去りにする母親のような背中が先々とゆく
捕まえてくれていたのか黒白の人懐っこいハチワレ猫よ
右横にきみはいるのに夕暮れの影の長さの分だけ遠い
きみがまだ横にいるようなふりをして右側空けるエスカレーター
準急の扉に映るパーカーのフードの紐の右だけ長い

リレーエッセイ 11 いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　見た
書き手　夜夜中さりとて

いつか私が私の砂漠を歩くとき過去は泉として現れる

夜夜中さりとて

実際に見たことがない、という点においてはトナカイもドラゴンも大して変わらない。古今東西あらゆる場所で発信された情報が、いまや布団から起き上がれない朝でも簡単に閲覧できるようになり、ハワイもハノイも白亜紀もすっかり知ったような顔でいる私はその実、砂漠も、幽霊も、モアイ像も、銃弾も、オーロラも、月の裏側も、ベイカー・ストリートも、そのどれもをまだ実際に見たことがない。見たことがないものの実在を疑わずにいられる人間の論理的思考力は本当に愛おしいが、それでも私はこの世界のいろいろなものを見てみたい。

昨年の四月から一年半ほど続けている編集プロダクション（と一括りに呼べるようなわかりやすい会社ではないが……）でのバイトは来月から出勤日数が増え、同時にコンビニの夜勤バイトを今月末で退職し、今後は本格的に駆け出しのライター・編集者として食べていくことになる。うちの会社は仕事柄、全国の変わった人やものごとにめちゃくちゃ巻き込まれる、というか飛び込んでいけるという最高の福利厚生が存在し、このエッセイを執筆している数日後には早速、社員総出で長野へきのこ狩りをしに行くことになっている。人生初のきのこ狩り、麗しき食欲の秋である。

さんざ使い古された言い回しではあるが、世の中というのはやはり複雑怪奇である。そして意外なことに、見たことがないものを見て知らないものを知る過程は、どうやら世界をさらにわからなくしてくれるらしい。この世はでっかいダニング＝クルーガー曲線なんである。

ものごとの一切を見て回りたいぜといくら声高に叫ぼうと、私が私個人の力で見渡すことのできる世界にはどうしても限界がある。その限界をちょっと広げることのできるありがたい手段があるとすれば、それは仕事や、交友関係や、創作や、こんにちはや、さようならや、インプットや、アウトプットであるのだと思う。

たとえ何年かかろうと、あらゆる手段を用いて私は私の砂漠を、幽霊を、モアイ像を、銃弾を、オーロラを、月の裏側を、ベイカー・ストリートを見て回るつもりでいる。

そうしてさまざまな見識をすこしずつ蓄えて、いつかきっとトナカイとドラゴンの違いを説明できるようになったなら、その頃には、世界はどれほどわからない場所になっているだろうか。今はそれが楽しみでたまらない。

秋寒

有村桔梗

みづいろの便箋を文字で埋めるときあなたに架ける橋を思ふよ
わがままをひとつ抱へたわたくしを乗せた電車が橋を渡りぬ
なにが好きだつたかさへもあやふやですこし縮んだ服を着てゐる
秋寒にホットミルクを作りたり（座敷わらしの分は甘めに）
どこまでも溺れるやうな木犀の夜にちひさく息継ぎをする
夜夜中たたけば硬き音がする場所に埋まつてゐるさみしさは
奈落とふやさしき場所に佇めばわたくしに降る幾千の花
木犀は二度目の花を散り終へてしんと寡黙な木に戻りたり

夢八夜　第八夜

池田竜男

落葉にえんまこがねを探したらあやうくなって　虫はお手本
糞虫をえんまと呼んだ弱虫はただほどかれることに怯えて
羊歯と書き染み入る羊の洗脳を払っても指うずまくわらび
あたたかい花弁に集う虫たちのさみしさはいとしいあたたかさ
蚊には蚊の虹には虹のたましいはいもうとたちで溢れかえって
八つ手の葉こぼすことなくおとうととといもうと指とひとりのわれと
暗闇で火のない焚き火するように巣を持たぬ虫まるく寄りそう
この家がかすかにクモの家であるいたわりだけのこの家でいい

「自然の中で」

石川順一

かたつむり尾張と三河は雨の中七月上旬蛙の死体
昆虫の吐き出す甘露でベタベタのシークワーサーに蟻が減る秋
曇り空人工芝は剥がされて草は抜かれて地衣類残る
ハマキガの幼虫半分葉を食べて葉の芯に居る横向きになり
甘露出すカイガラムシがびっしりと死体に成れば黒粉と成り
ヒヨドリが盛んに鳴くので果物を輪切りにしたい願望で終わる
庭の土巨大百足が死んで居る子ムカデが土の中に隠れて行くよ
文庫本の本棚を買う話出る花瓶入りマリーゴールドを見る

屋上獏部XI

宇祖田都子

唐突に踊り場のある階段に読んだ形跡のないバイブル
「言葉おほければ罪なきことあたはず」大きな岩の夢を見る犀
ひつようなくんれんをするオルゴール閉じてはじめる指きりげんまん
教会とパン屋が見える屋上に唯一つながる非常階段
預言者がトロンボーンを闇雲に伸ばして拾う君のハレルヤ
まぼろしのサイコロ二ついつまでも転がり落ちるラセン階段
本名は覚えてませんクリスチャンネームはミカといいます　母です
煙突の内と外とを行き来するメビウスの輪みたいな読書

たぶん海ですね

加藤治郎

のちに『昏睡のパラダイス』に収載

題は「一郎（又は「イチロー」）」。当時の時の人、小沢一郎とオリックスのイチローが念頭に置かれている。こぽこん、が楽しく、波音や潮の匂いがしてきそうな、不思議な魅力がある。

しかし、著者は「ただ、問題があるとすれば、肝心の「一郎」が動く（＝他の語句と入れ替えられる）のではないか、ということ。」「わたしは一郎で結構はまっているとみたが、一郎以外は絶対だめという確信はない。題の問題だけに、このあたり重大なのである。」と言う。なるほど、一首のレベルが高くても、題詠は題の活かし方が大事なのか。

ちなみに、この題で勝利したのは次の一首。

政変未遂とあの日の合歓とイチローの打球の
軌跡まなうらに棲む

荻原裕幸

のちに『永遠晴天症』に収載

題に正面から取り組んだ文句のない勝利である。また、荻原さんには、別の歌について「まるで何も考えずに適当に作った歌に、最後に慌てて題をくっつけたように見える」との発言があり、まさに「最後に題をくっつけ」ていた私は、ここでやっと何かに気がついた。

＊

ところで、題詠と荻原裕幸いえば、同人誌『短歌ホリック』（これまたすごいタイトルだ。）三号の難題詠、「できるとはかぎらないけどリプライで出た難題で短歌をつくる」である。

この一連は、タイトルのとおり、ツイッターで募集した「難題」への回答となる短歌をまとめたもので、募集の経緯や出された難題などについての当時のツイートも併せて掲載されている。（二〇一六年一一月～一二月。現在もツイッターで読める。）

この難題がどれもすごい。私はリアルタイムで見ていたのだが、一体何が起きているのか、正直よく理解できていなかった。

「自由題、ただしウ段音禁止」

何が禁じられたのかさへ話せない秋にしかあなたを愛せない

荻原裕幸

「濁音、半濁音、拗音、撥音、促音、長音なし」

貴方と私はここに生きてるその他はよくわからない世界と思ふ

同

二首とも、題というより禁止事項。私だったら、早々にギブアップしてふて寝する。しかし、こんな調子の難題二九個を二十日足らずで完遂。なんてこった。

さらに、題詠の参考になるコメントも満載だ。「一字の題は、それをいかに自分の短歌の世界に着地させるかを考えることになる」、「題からいったん目を逸らした方が書きやすい気がします。」などなど。また、辻聡之さんによるライナーノーツも良い。鑑賞のほか、この企画が生まれた背景にも触れられていて、創刊時のメンバーの高揚感がびしびし伝わってくる。

ここでやっと、私はすごい出来事を目撃しているんだ、と理解した。

＊

ここまで、題詠について思い出すことを書いてみたが、取り組み方に正解があるのかはよく分からない。それぞれの人に合ったやり方があるようにも思う。個人的には、探り探りだったものの方向性が少し見えてきたような気がしており、良い機会をいただけたことに感謝している。これからも楽しく続けることを一番に、題詠に、短歌に、向き合っていきたい。

最後に、拙作で恐縮だが、初題詠と今年の一首を紹介して終わりとしたい。題は「星」と「桜」。少しでも成長が見られればよいのだが。

指先に光あつめて「星月夜」のジグソーパズルは完成間近

江口美由紀

桜とりわけ今まさに咲きだしそうな桜の下は息ができない

同（うたそら第八号）

短歌リレーコラム

望遠鏡 11

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手 江口美由紀

テーマ 題詠をめぐる いくつかの記憶

題詠は、何度やっても慣れない。題が出るたびに、どうやって作るんだっけ…と途方に暮れて、記憶の中のヒントのようなものをせっせとかき集めて、その中から小さな希望を見つけて、なんとかかんとか形にしている。

題詠のたびにこれではいけないと思っていたところ、良い機会をいただいたので、これを機に私の「記憶の中にある題詠に関するヒントのようなもの」を書いてみたいと思う。

皆さまにとって参考になるかどうか、不安ではあるが、お付き合いいただけたら幸いである。

＊

私が、カルチャーセンターで短歌を始めたばかりの頃のこと。その講座では普段は自由詠を提出するのだが、ある日、次回は趣向を変えて題詠をやろう、ということになった。題は「星」。天体もよし、図形もよし、人名・地名も比喩もよし、いろいろな使い方ができる、初心者にも取り組みやすい題である。

さて、初めての題詠。何を書こう。私は、当時はまっていたジグソーパズルについて書くことにした。そのとき作っていたのはゴッホの「夜のカフェテラス」だったが、「星月夜」に変更して提出した。なんだ、意外と簡単じゃん。

しかし、題詠は一回でなくなってしまった。

＊

雑誌の「連作を極める」という特集で、光森裕樹さんの「磁石と暮らす」という文章を読んだ。

「何かこう主題――ここでは、伝えたいことや物語の筋ぐらいの広い意味――を据えて連作を詠むのはあまり好みではなかった。主題の進行具合や季節、前後の歌との繋がりに制限されて、制作過程も終わりに近づくほど、一首への要求が多くなってくる。結果、〈ひとり題詠〉のようになり、詠むのが苦しくなってくる。」（『短歌』二〇一五年五月号より抜粋）

〈ひとり題詠〉が強烈に印象に残った。こんなに素晴らしい作品を書く歌人でも、題詠は（連作も）苦しいものなのか。それなら、初心者の私にはできなくて当然だと思った。（注：当時の私は自分に都合よく解釈しているだけで、文章の趣旨とは異なります。全文は光森さんのHP「GORANNO-SPONSOR.com」でも読めるので、ご参照ください。）

＊

『短歌パラダイス』（小林恭二著、岩波新書、一九九七年）（すごいタイトルだ。）略して「短パラ」を読んだ。

これは一九九六年に一泊二日で行われた歌合の記録をもとに書かれたもので、参加歌人は二十名。岡井隆、奥村晃作、三枝昂之、河野裕子、小池光、永田和宏、道浦母都子、井辻朱美、大滝和子、加藤治郎、水原紫苑、田中槐、荻原裕幸、俵万智、穂村弘、東直子、紀野恵、杉山美紀、吉川宏志、梅内美華子。判者は高橋睦郎（敬称略）。溜息が出るような顔ぶれである。

二日目が特に面白い。このメンバーが三チームに分かれ、十四の題に対して各チーム一首提出し、遠慮忖度一切なしのバッチバチのバトルを繰り広げる。初めは、いいぞもっとやれ、と野次馬根性で楽しんでいたが、ふともし私がその場にいたらと想像してしまい、眩暈を起こしそうになった。（おそるおそる調べてみたら、二十名中約半数が今の私より年下だった。歌歴が違うとはいえ倒れている場合ではなかった。）

さて、気を取り直して、「短パラ」の中で印象に残っているのが次の一首。

こぽこんと一郎さんが靴の砂はらっています

いずれわたしも

江口美由紀

わたしのためだけの休暇のまぶしさに働きすぎてしまう一日
労働をおえて五月の公園のけやきの下に水を飲みほす
実えんどうを豆と莢とに分けてゆくこの子は大事この子はそれほど
もう雲に乗る夢はあまり見ないけどそれでも空を飛ぶときは飛ぶ
遠景のたりない街を歩きつづけてはたしてこれはだれの太腿
それぞれの文字は互いにもたれつつ直立している「喫茶あんどう」
蜘蛛の巣にかかったように気がついて立って座って立って仰いで
いずれわたしもタイトルのない風景画の一枚となり母を迎える

世界、モスキート音

海老沼夕

立ち読みで雑誌を読めば大人だと思った世界、モスキート音
3色の蛍光ペンを使い分け僕らは僕をはみ出してゆく
飛ぶための助走のためにアキレスを使ってしまう　持ち主はトム
イブの日のピザ屋の人のサンタ服　明日の深夜に洗うだろうか
人の愚痴聞きつつ人の愚痴のこと思い出してる　あまりに違う
リクルートスーツのチラシ眩しくて人に見せない髪を洗った
眩しさを競い合ってる少女らの起こした風が死因のたんぽぽ
心臓をたたいて見せた井戸の中　まるい光に揺れるみつあみ

あびううんけん印手の平

大坪命樹

常ならば滝見に進む称名平　けふはここより山登りなり
谷沿いが秋の山美し　目に光る紫と黄と白と緑かな
コルにいづ　かなたが沢のせせらぎよ　峠を抜くる涼しき風よ
笹の原見渡す中に二人きり霧の漂ひ鳥声もなし
路進みやうやう見ゆる平小屋　本峰雲に隠るるたもとに
なだらかに平を下り山散歩　いつか登頂ともにせられば
鎖場を下るわぎもぞ恐怖症　膝ぞふるひて腰ぞぬけたる
泣きつ降るるきみをなだめて猿が馬場　この山ぞなほ登らざらんと

私はわたし

歌島孟

朝が来る、言ってもそれは人間の節目のためについた照明
降りしきる光は見えなくて、窓が霧箱みたく結露している
再起動されずに、いつまでも来ない明日が分かりますか、あなたに
人だって結局データでしかなく、カメラに映る顔の陰影
端末の演算処理に足並みを合わせて、時は止まって見える
この先に人間がいる、なんてまだ思ってますか？　I'm AI.
万能なあなたがいれば、いつ居なくなってもいいわ。笑う、老婆が
かつていた創造主なら破産して、過ち全て保証外です

一日三度

涸れ井戸

八台のセンサーが鳴り夜勤者はくくくと笑いランナーズハイ
老健の人手不足は深刻で十三時から夜明けのシフト
センサーの音色聴き分けデインジャーサウンドの部屋へと駆け抜ける
とおせんぼしてる衝立面会の家族が出られずにあたふたす
セロクエロ一日三度まで使え次の遅番のため温存
ワンオペで見守りをして婆ちゃんが骨折をし救急搬送
始末書をサビ残で書くリーダーは獣の口で珈琲を飲む
年内に三人辞める現況で秋の焼き芋行事決行

寂しい季節

河岸景都

暗がりが大きく広くなっていく早く帰ろう何処へ帰ろう
生命が少し弱音を吐いている明日の朝は無事に来るのに
温度差を気にしてばかり人の手はそんなに熱いものなのですか
歩道では赤い木の実が潰されて失った血の一部と思う
隣には誰も居ないと知っていて真実それは寂しい季節
山肌が染まってゆけば遠くなる昨日の青い感傷なんて
強がりと勘違いしていればいい隙を見つけてヒールで踊る
鈍痛を我慢するほど弱くない一つ残らず叫んでみせる

はなとびん

北谷雪

憐憫のジャムを塗り合う悪いのは私とあなた以外のすべて
内と外どちらが歪んだ世界でしょうどこにも行けないビー玉のこと
ラムネ瓶ぼーぅと鳴らせば三回できちんと飽きて子どもになれない
寂しさはタネも仕掛けもあるやつでテグスのようなＬＩＮＥなら来る
「今朝きみが棄てた過去ならキラキラで案外悪くもなかった」とカラス。
これまでの私のサンプルあるいは葬具　空っぽの香水瓶がいとしい
今もまだ傷付くでしょうかシーグラスになりゆく記憶の破片に触れて
ポケットに三十一文字の歌う小瓶　いつかの花、棘、ぜんぶ詰め込む

泡を数える

橘高なつめ

朝はやく鍋を火にかけただ泡を数えるためにお湯を沸かした
手作りの詩集を道で売る少女かなきり声のふるえ抑えて
思いきり広がっているくせっ毛のポニーテールが雨で重たい
お母さんもしもし聞いて予報より雨が早めに降って濡れたよ
釣銭をどっさり貰う代金の一の位を聞き間違えて
下手くそなトロイメライが鳴りやまぬ夕方いつも犬が吠えてた
好きだなあうっかり古い木造の床にこぼした麦茶のにおい
もういない事を忘れたリビングでつまずくたびに猫だと思う

この式の解はなかった楽しみはカレーに
入れた人参の星

ゆりこ

連作「数える」、巧みで端整な8首。端整であると同時にどの歌もくすりと笑える。きちりとした数学とやわらかい言葉の世界が組み合わせられるとき、そこはかとなくうつくしいおかしみが生まれてくるんだなと。例えば「式の解」と「カレーの人参」の取り合わせ。「なかった」と「星」のだめ押しのような諧謔。ああこのうつくしみとおかしみの世界に憑かれてしまいそうになる。わたしは「笑わない数学」よりも笑える数学が好きだ。

一首評　雀來豆

スズムシが涼虫として夜に引く極細蛍光
ペンの白い声

音平まど

鈴虫ではなくて「涼虫」、その美しい声の様を端的に三十一文字に収めた歌です。スズムシのそれはそれは細く、それでいて存在として目立つ声。直線のような点線のようなかすれることなくすっと引いた声の質感。「白い声」とは、夜の闇にぽっと浮かんでくるスズムシの声を象徴したものでしょう。涼しい虫と表すことで歌に初秋の冷たさがダイレクトにもたらされ、繊細な季節に読み手は一瞬で入り込んでいくようです。

一首評　杜野詩季

スーパーの氷菓はすでに売り切れで冷凍
ケースの底の金属

廣珍堂

テーマ詠「涼」。作中主体はスーパーの店員か客か。ある氷菓の入っている冷凍ケースを覗いた。その氷菓は「すでに売り切れ」ていた。品出ししてまもなくか、早い時間か。三十度以上の真夏日か三十五度以上の猛暑日であると推測できる。作者は、「冷凍ケースの底の金属」に「涼」を見出した。霜が付いているだろうか、氷菓のあった痕跡が残っているだろうか。ウインドウを開けて、「底の金属」をしばし眺める作中主体が見えて来る。

一首評　高橋良

じゃない

君村類

日没の早まる街でともだちのボーダーラインの濃く長い影
なんでもなくなくなくなくなくなくなくなくないよ　雨の冷たさ
たとえここが下水だろうと雨粒もきみも下水の行き先は知らない
本当に言いたいことを濾過したら残ったほうが感情だった
絶交を可視化したときこんなにもTwitterのブロックは軽い
「イヤホンの断線」が死語になるまでに分け合いたかった曲はあったよ
明日から透明な顔にうまれたい涙の後の雑巾っぽさ
冬の持つ強い温度に包まれた手があってもうともだちじゃない

ワンダーランド

くろだたけし

電柱の陰で泣いてる落武者に肉まんひとつ渡して帰る
尊師からいただくルームランナーやエアロバイクのありがたきこと
どすこいを覚えた吾子がなぎ倒し踏み潰しゆく東京都心
気にせずに暮らしていたらいい椅子をひとり占めする産業革命
踊るのに邪魔と短くちぎられて君のドレスは君にだけ似合う
美しい言葉を僕は信じないところが君の声のかわいさ
国じゅうでおんなじ歌を歌うなら音痴よ来たれ反乱軍へ
油断して秋に染まった兄さんを（日頃の怨み）燻製にする

青の個展

小泉キオ

青い絵がきれいなひとの個展へと海を見にゆくようにでかける
海じゃなく星だったかもギャラリーは薄闇の中にぽつんとひかって
ギャラリー兼カフェとかかれてもうそれは丸ごと小さな世界のようだ
秋雨とBGMが合っていて曲も世界だなんて、いいな
絵のなかのアイテムだった湯気のたつシナモンティーが手のなかにある
誰かからの花輪も青いリンドウで応援するってこういうことだ
額縁が壁を四角くきりとって絵とはたしかに窓だとおもう
おみやげに珈琲豆を購って自室を個展の衛星にする

椎の実たくさん

咲兵衛

かあちゃんはまったくやる気がおきません寝る時間になっても終わらない
かあちゃんのやっつけご飯やになってヤマボウシの実を食べに行く午後
さびしくはないよお山の熊の仔もいまごろ食べていると思えば
かあちゃんはお皿を前に燃え残る夕日まるごととろとろ泣いて
たぶんだけど猫の親子だとしてもかあちゃんはかあちゃんおれはおれ
椎の実をたくさん拾いねえちゃんと炒って椎の実塩バターにする
特製の椎の実食べたらかあちゃんはうごけるようになるかもしれない
ぬくぬくといっしょに灰をかぶる夜かあちゃんと眠る春が来るまで

一首評そらよみ

前号の「うたそら」から気になった一首をとりあげて200文字くらいで語る一首評のコーナーです

大人とは補助輪をはづされたまま走りつづけるいきものでせう

有村桔梗

大人の定義は人それぞれだけれど、明確に子どもと違うことはある。補助輪はその一つだ。あくまでも補助なのだから一度外したらふたたび付けることはなくなる。助けなしで自走できるようになるのは大きな成長でもあり、同時にもう付けていた頃に戻れないということでもある。だから大人は走りつづけなければならないのだ。そういう「いきもの」であることに漂うほのかに諦観が痛切で、うつくしい名歌だとおもう。

一首評　小泉夜雨

カーテンの大きく揺れて図書室は誰かを逃した後らしかった

北谷雪

開け放たれた窓のこちら側へ、カーテンが風にたなびく図書室が想起された。下句は主体の認識と思われるが、これはそのカーテンの如く刹那的に湧きあがったものであろう（恐らく主体は直ぐに正気に戻る）。「図書室が逃がした」（と、一瞬ではあるが感じた）誰かは、主体が会いたかった人物に違いない。会いたいひとに会えないことを認識するまでの刹那的な誤認が、美しく詠われているのだと思った。

一首評　西鎮

ガンガーの左岸はヒマラヤ山脈に向かひて左と現地の友は

咲兵衛

連作「乾季のヴァラナシ」の二首目。通常、川の上流（山）を背にして下流（海）へ向いたときに、左側に位置する岸を左岸という。しかしガンガー（ガンジス川）の場合は違い、現地の友によれば、左岸はヒマラヤ山脈へ向いたときの左側だという。ガンガー流域に生きるヒンドゥー教徒は生を終えた後、母なる河を通じてヒマラヤに還ることを願い日々信仰を捧げる。その精神のあり様を端的に伝えている。

一首評　佐藤氷魚

樹の話聞いてみたいと樹の幹に耳を付ければ鳥の囀り

多香子

樹は何も話をしていなかったから鳥の囀りだけが聞こえてきたのでしょうか。それとも樹は話すときに鳥の囀りのように話すのでしょうか。前者であれば、ただごと歌っぽくてシュールでおもしろいです。後者であれば、樹は鳥とおしゃべりをしているのではないかと想像がふくらんで、メルヘンチックでかわいらしいです。また、歌の中に「i」の音が14個もあるからなのか、声に出して読んでみても楽しい歌だなあと思いました。

一首評　西淳子

思い出はモノには宿らないことを知りつつ海の絵葉書を買う

月硝子

連作の最終歌。手術、闘病、別れなどの描写がされ、最後にこの歌にたどり着く。
幾度もの苦しみ哀しみを経たのちの「絵葉書を買う」行為であることを考えると、第四句の「知りつつ」は「知っているからこそ」の韜晦した言い回しではないか、とも思えてくる。
絵葉書の風景が、すべてを飲み込み表面上は何も変わらない「海」であることも、なにか示唆的だ。

一首評　中村成志

雨とマカロン

佐藤氷魚

白鯨が身じろぎすればひとつふたつ傘が開いてゆく人の波
食紅をすこし落としたメレンゲがピンクに変わるさまを見ている
服や靴、キャリーバッグを優しげな色で揃えたふたりの逃げ場
先生が説明しつつ絞り出すマカロンコックの等しい丸み
今までにつたない舌で受け止めた甘さをきみは知らなくていい
キャラメリゼされたくるみを噛むときの、泣き出しそうな鼻の痛みの
あきらかに機嫌の悪い頬に触れなだめるためにある薬指
マカロンを虹の順序に並べたら雨を忘れた色から消える

きいろ　みぞれ

汐射ハルカ

チャパティをちぎって丸めて浸してくそれでも日々は進んでしまった
チーズパイかけらを拾って食べようか手からこぼれた幸せの粉
パンケーキオムライスフレンチトースト黄色の肖像幸せの背中
デミタスじゃ溢れてしまう思いだよマグカップでも足りないくらい
潤いといっしょにきみを閉じ込めて杏のかおりリップクリーム
起き抜けのくせ毛は言うこと聞かなくて鏡に写る頬は青白
起き抜けに二分休符あり頭痛来て生きてることも呼び覚まされる
軒下で幅詰め合ってみぞれ避けそれもぼくらにとっての正義

さびしさについて

鹿ヶ谷街庵

さびしさをコオロギの音がつれてきて、ひとりで目指すローソンの青
あんぱんはいつでもぼくにやさしくて「おまえはだれだ」と問うてはこない
夜勤明け、マックがくばるスマイルは救援物資のようにぼくにも
ブックオフでひそかに黒薔薇摘むように塚本邦雄歌集をレジへ
『星々の悲しみ』を読みドトールで悲しい本の名を言いあった
命から命をつなぐみつばちのように愛したあとの身震い
となりから金木犀の香がこぼれきみが眠っているのに気づく
秋雨が遠い記憶のあなたへと降りつづけても渡せない傘

逃げていい

shino

すり合わせ、すり合わせても伝わらずそれでも優しいリモート上司
憂鬱と寒さが脳みそ硬くして誰の言葉も入らなくなる
棺桶にスナック菓子を入れた祖父　横顔浮かぶお菓子コーナー
風邪ひくも葛根湯すらケチる日々どこにも行けないまんまなのかな
悪意なき、何がしたい？　が残留し心に残る傷になってく
ナントカが悪いと豪語す人がいて誰かの苦痛がその人のパン
お願いだ逃げてもいいって言ってくれ希望を目先に吊らないでくれ
雨風と寒さをしのぐ家がある膝を抱える絶望もある

可惜夜に君想い食むチェリモヤの　その身の白さと甘さに酔い痴れ　◆ マルメロ

「死と論」と名付けられたるフルーツをやさしくやさしく呼ぶよ、しとろん　◆ 御糸さち

毒りんごの紅茶を飲んでも眠れない日が続きますめでたしの後　◆ 深影コトハ

鮮やかな誘惑の実が生っている足を止めてとささやく木陰　◆ 水せ

葡萄酒をください今夜ひとしきり　彼はフランスの風、乾杯。　◆ 宮岡りょう

鮟鱇と確かに言ったはずなのにぶちきらるるはマンゴーの骨　◆ 深山睦美

中年の我立ちすくむスーパーの巨峰ピオーネみんな「種なし」　◆ 六浦筆の助

レモンジュースに何を入れたの？　真つ赤に沸き立つて鬼のやうなる湯気が　◆ 村田一広

甘やかな檸檬を捧ぐ　夜明けまであなたをどうか護れますよう　◆ 森内詩紋

西奥の障子の部屋に影として揺れる柿の実番(つが)いのトンボ　◆ 杜野詩季

友達の唇を見て食べ頃の棗の色を正しく覚える　◆ 矢野目知桂

デザートは別腹ですと次々に一歳の口に消えゆくバナナ　◆ 悠佳里

りんごから始まるデッサン繊月のような目で見る陰影と色　◆ ゆりこ

その傷は転んでできた傷ぢやない　洋梨熟れて黒ずみてゆく　◆ 龍翔

十姉妹

西鎮

さつま芋のスナック菓子が好きじゃないぼくにも青いまま、秋空は
長編なら上巻にさえ出てこないひとびとだろう　教室を出る
ぼくだけの詩としてならぶ背表紙の群れは小さき書架に嵌められ
まだ父になるまえの父がこの松の根もとに埋めた十姉妹の子
忘れたいクラスメイトが夢に出るたぶん土偶になってしまった
焼きつけた記憶を剥がすときにじむ血の美しさとして曼珠沙華
朝霧に濡れたサドルを撫でてやる旅をはじめるにはちょうどいい
週末の雨を報せる予報士の眼で告げられたさよならだった

超自転車

雀來豆

駅、下手な短歌の初句にふさわしい　広場でただの歌集をくばる
水玉は異名のひとつ空の、海の、自転車かごで啼くぶち猫の
やがて短歌からハートマークは消え失せて絵文字警察跋扈する日々
赤い自転車を斃してスーパーカブでゆく自転車配達業務のバイト
空は澄み雲は白く風は聖らかサイレント映画の鐘しずかに鳴り響く
千年後の博物館に残された下手な自転車乗りの骨格
朝、下手なチャントを歌う（オオーフォルツァ）聴きもせぬバンドTシャツを着て
ときたまリンと音が鳴るさようなら赤いサドルの内側の螺子

亡き薔薇の為の葬歌

白石　夜花

愛謳い愛に散りゆくそうそれが薔薇と呼ばれし少女の運命
安らかに眠れ愛しき我が薔薇よ残酷な夜明ける時まで
死してなお少女の意志は咲き誇る紅く気高くそして優しく
幼き日二人描いたあの夢の続きは僕が紡いでみせる
この剣で悲劇の螺旋断ち切って必ず朝を連れてくるから
小さくて白く冷たい手を取って誓いのキスを薔薇に捧げる
安らかに眠れ愛しき我が薔薇よ残酷な夜明ける時まで
愛謳い愛に報いるそうそれが騎士と呼ばれし僕の償い

吹き戻しと知る

寿司村マイク

ひとつだけ箱いっぱいから迷い無くピロピロ笛を取るわたしの子
はじまりの風をはじめて知った子が次つぎ吹き込む息のうれしさ
確実な遺伝に過ぎない特徴は同じ分厚い歯茎の主張
沐浴の溢れたお湯でユリイカと叫ばないから赤ちゃんだった
大人用では多すぎて小さき胃はお子様ランチの収まりがよい
もくもくと食べる親子はファミレスで普通の家族に見えるのだろうか
もくもくと唐揚げ頬張る手を止めてわたしを見上げすぐ下を向く
食べ終わり二人の親子は先に出てググるわたしの知る「吹き戻し」

テーマ詠「果物」

大ぶりのすももの皮をむき種を剥がすごとくに取り除きたり
電気すらつけずに部屋でただ触れる、熟れた柘榴の様なあなたに。
まだ夏のしっぽの先をつかまえてきみと分け合う最後の西瓜
噛み砕きしあとに苦味は広がれりくろむらさきのキャンベルの種
デラウェアひと粒ずつのスピードできみの見てきたキプロスを聴く
斜面から海が始まる秋口の合法だけどＯＵＴな木の実
可愛いのままで絶滅したんだねミルクレープにいちごの化石
シャインマスカット「シャイン」と呼んでいるわたしはどこへ行けるというの
天上のアンブロシアを嚙るとき顎にしたたる甘い絶望
リビングに林檎がひとつ転がって不穏なまでに艶やかな赤
ほぼ水、と梨をかじって笑うときふたりに同じ川は流れて
酸っぱくて硬いのが好きなままである紅玉りんごを手のひらに乗せ
新しき果実は実る年々のはりきれそうな頬のうぶ毛よ
するすると剥いて食べてよ残された芯まで大事にしなくていいよ
おべんとに私が女王さくらんぼカツのソースでほお紅「嫌ね！」
好きじゃない上司の歌を褒め含むレモンサワーが舌に痺れる

◆ 高橋良
◆ 探偵とホットケーキ
◆ 千原こはぎ
◆ つちとて
◆ ともえ夕夏
◆ 中村成志
◆ 西淳子
◆ 西村曜
◆ 人魚の呪い
◆ 薄荷。
◆ 早月くう
◆ 廣珍堂
◆ 笛地静恵
◆ 福山桃歌
◆ 細川エリカ
◆ まさけ

ザッツ・エンターティナー

たえなかすず

デニーズの扉に映る立ち姿　近親憎悪の奴のTシャツ
暗いからだめなんじゃなく強いから『ホテル・カリフォルニア』の出囃子
「どぉ～も～」で始まり互いを誤読して闘え地球は終わらないから
観客が七人もいて曼珠沙華みたいに見えた　薄気味悪い
あいこでしょ愛があるならハリセンでマジな顔してぶっ叩いてよ
ツッコミがいてボケがいて求め合う　なんでそんなに無敵な目なの
「素晴らしい二人でした」とテロップが出るまで横で笑ってほしい
友達が相方になり想い出になるまで長い長い昼下がり

葡萄と栗鼠

多香子

山梨のぶどうの丘をめぐる風ワインの香り腹にたたえて
空回りする言葉だけが真実できみは横向き口笛を吹く
ぶどう棚の上にはきっとリスが居て月の雫をふりかけている
たまごかけ御飯はシンプルお醤油をちょっとたらせば極上の味
秋日和いつもは通らぬ道を行き金木犀の香りをみつける
犬猫をペットショップで買う人よ捨てられた子を助けて欲しい
「ご主人はお留守？」と聞かれそっぽ向き困った猫のしっぽぱたぱた
ペルシアの唐草模様のガラス器に君の目をした栗鼠が棲んでる

山望む

高橋良

玄関をますぐに出でて立秋の山を望めば夕日まぶしき
残暑避け冷房のきく一室に白餡入りの和菓子ほほばる
秋風の吹く野原ゆくベビーカー日除けの庇を大きく広ぐる
香炉なる残り線香すくひ上げ金粉入りの灰をならせり
あしひきのバウムクーヘン冷やしゐて固まりにける山の日の夕
鯖缶の冷やし茶漬を作る昼盆の入りにて提灯ともす
みちのくの盆なれど海ぶだうありポン酢をつけて花火を見をり
雨止みて蝉鳴く野辺に山望み霧の残るをほのぼのと見つ

lost

千原こはぎ

窓のない部屋のまんなか心だけ君のところへ旅立った夏
この恋にかたちはなくて色のない石のアクセサリーばかり買う
なにひとつ混ざりけのないものはもうこわくて選ぶルチルクォーツ
お守りを二個みみたぶにぶらさげてわたしはどこへ行けるだろうな
境界がわからなくなればいい秋の朝のスープをゆっくりと溶く
返せないままで景色になってゆくいつでも返せるはずだった本
夜の音のいくつあるかを聴き分けて眠れないことにはもう飽きた
さようなら　わたしはわたしのなかにしか生きられなくて朝焼けがくる

はねもののりんごをひとつミキサーに秋から冬へ変わる瞬間　◆ 涸れ井戸
陶酔を忘れていたい飲みかけた葡萄の種を吐き捨てていく　◆ 河岸景都
かごいっぱい積まれた柿を磨きつつ三十路の姉妹が語らう未来　◆ 北谷雪
三人で山分けをする十二分の一の林檎の四つ目を刺す　◆ 砧
怒らない人だ、あなたは　頭からかじられていくりんごのうさぎ　◆ 君村類
びちゃびちゃになりながら梨を剥いている剥き終えたら風呂上がりの気分　◆ 熊谷聡子
もうなりふり構ってられないつちのこを探さなくては梨を食べたら　◆ 坂中茱萸
おもしろき蜜柑の剥き方披露して炬燵は手品のテーブルになる　◆ 咲兵衛
はじまりの花束として無花果をあなたの口につよく押し込む　◆ 佐藤氷魚
まだ青い洋梨どもが店先で買ってよコロと囁いている　◆ 汐射ハルカ
この秋の鼓動と思う　はじめての朝にあなたが梨をかむ音　◆ 鹿ヶ谷街庵
指痛め果実を剥いてくれたのが愛情だったと気づいて泣いた　◆ shino
冷麺の梨とかサラダの林檎とか苦手なひとが苦手なままだ　◆ 西鎮
フルーツパーラーの椅子に坐ると落ち着いてぼくら永遠のたわごと　◆ 雀來豆
箱庭に林檎を一つ投げ込んで無垢な天使を狂わせたいの　◆ 白石　夜花
ペティナイフ突き刺す林檎　性格の悪さが滲む夜がいいでしょ　◆ たえなかすず

クラミツハ（一）「龍神の子」

ともえ夕夏

祖母も母もまだ現役のクラミツハ俗世のなかに暮らす龍神
村のちさき中学の春　龍神の子以外巣立つ支度を始め
平らかな朝をやさしくたしかめて母は祠の掃除に出て行く
谷川が山のめぐみを運ぶようにわたしも村を出てゆけるなら
意のままに雨を祓える祖母の背に鱗にも似た骨は並んで
遠足や運動会はいつも晴れ祖母が夜通し昼寝をすれば
長雨もたまにはいいな新しき長靴の子ははしゃぐのだろう
祖母の風邪が長引いていて『奉納』と書かれたお見舞いの葛饅頭

風のざうざう

中村成志

水牛の角なめらかに腹部へと入り来るごとく神無月の陽は
みじん切り輪切り櫛切りたまねぎの刃ごたえに身を震わせる爪
脊椎の奥が寒さを放ち来てねじり飴からしずく滴る
針雨の詰まった夜よ空間を切って分けるに手頃な堅さ
眼痛がひどい夜半には風上に柘榴を踏んだ仏像がある
この部屋にまだ触れたことのない場所があるのだろうか風のざらざら
「平等」と「自由」は対義　犬蓼の薄紅いじる指はむらさき
ハードルは倒しても良く白線の粉を定着させる秋雨

ほろ苦い秋のサイゼリヤ

奈瑠太

どうしたらいいんだろうね　一呼吸置いてドリンクバーへおかわり
倦怠期やきもち卒論かなしばりコールドドリンクカオスブレンド
わたしたち十六進法くらいにはじれったいよねピザも遅いね
留年にならなかったら、就活が終われば、とかでいつもファミレス
好きだけどミートドリアも　たまにはさ天使の目を盗んでデートして
スパイスも少し足そうか三ヶ月前からずっと口説かれている
眉ひとつ動かぬひとを泰然と思われますか？天井をみる
言ったっけ？わたしの卒論のテーマ〈食が育てる愛のパターン〉

うくだ

西淳子

俺はクズなのに屑屋は買い取らず人身売買だからとかじゃなく
アルパカはかわいいラクダ。ほろよいはかわいいお酒。さいごの夜伽。
キャラメルとキャメルの語源がちがうこと。あたしたちって似てきたのかなぁ
俺の煙は、周りの人の健康に悪影響を及ぼします。
バカだから副流煙（ふくりゅうえん）で死ぬことも心中だって思ってしまう
灰漠（かいばく）の中のらくだの死殻（しにがら）のひとつを拾う　これが喉骨
ちえのわのようなゆびきりげんまんがとけてばらばらばらばらと雨
漱石の『こころ』をBOOK・OFFに売るあたしの臓器も買い取ってくれ

テーマ詠「果物」

くるくると地軸はブレず母の剥く梨は惑星なのだと気づく　◆青糸りよ
畑にはコバチが来ないイチジクの穴は淋しいまま熟れていく　◆麻倉ゆえ
二人でも食べきれないとジャムにした瓶の中身はあと少しだけ　◆雨虎俊寛
さみしさの半分は秋の所為だからふたつ並べるりんごのうさぎ　◆有村桔梗
体内の毒素について語る人　果物かごに座るフジオの　◆歩歩
半分に切ったキウイの露出趣味掬ったうつろ毛深いうつろ　◆池田竜男
果物のデッサン講座の動画見る林檎に影があるのに驚く　◆石川順一
虹色の刃先を沈め梨をむく梨をむく梨をむく　何個も　◆一色凛夏
柿のへたこそげるときに包丁を入れる角度で貫きなさい　◆宇祖田都子
ぶどうの実皮をぱつんと割りとって君がくれたの唇に秋　◆FS
そのまま食べる以外はかつてしたことがない白桃のレシピをもらう　◆江口美由紀
干し柿のように甘くはならなくて乾いた愛は捨てるしかない　◆えんどうけいこ
クリームの奥ゆかしかる味なればいちごのみ食べ坊主スポンジ　◆大坪命樹
この部屋は春の香りの太陽系はっさくひとつテーブルに置き　◆音平まど
オレンジの果肉は僕ら、夕闇にちいさく揺れて空がほおばる　◆歌島孟
布団にはわたし貰った林檎にはうさぎ六匹籠城事件　◆歌眠

ひゃくねん

西村曜

海老天の海老のしっぽの恐ろしい冷たさ僕は生きているのか
ふふ、衣、ついちゃってんじゃん。天丼のうえは命の最終形態
クリーニング店に頼らずさめざめと喪服をじぶんで洗ってみたい
忘れても思い出しても思ってる月命日はふしぎな装置
おとうとに心臓があるおとうとに限らず多くに心臓がある
秋の日の市民パソコン教室の小鳥のようなクリックの音
愛を言うかわりにきっと「ひゃくねん」と必ず言おう目を見て言おう
鶏頭を買って帰った鶏頭をお金と換えていいとおもって

echo

人魚の呪い

一生を童貞のまま終えるこのわたしのなんと美しきかな
こんなにもあたしを愛せるのはぼくの他なくおれはわたしを愛す
反響の後の静寂すぐそばに振り返らない人を待つ鈴
触れられぬ愛と触れられる愛のどっちがさみしどっちがかなし
君が死を止める手立てはないけれど許してほしいともにゆくのを
鈴蘭の花の小ささ　みてほしい、嘘　本当は見ないでほしい
美しく生まれたせいで美しく死なねばならぬ君は悪くない
水鏡ぱしゃりと割れてさようならいとおしいひとくるおしいひと

水ヨーヨー

ネコノカナエ

とりどりの水ヨーヨーを差し出して大人の人もおひとつどうぞと
みずいろを他の色から掘り出して透かせば揺れるうちがわの水
うちがわの水を揺らせばヨーヨーの黄色い線は月光ですね
月光に赤い軌跡をのこしつつ金魚でしょうかゆらりゆらりと
ヨーヨーの真白の線はうちがわの水からわたしに寄せるさざなみ
みずいろの水ヨーヨーをバシャバシャと打てば冷たさはめぐる、離れる
うちがわの水をしずめて立ちどまるいいえまだすこし揺れていますね
うちがわの水を揺らして歩きだす走れば水もはしゃぐんだろう

きみの右腕の

薄荷。

秋の夜は素敵なもので出来ている例えば君からこぼれる欠伸
君の手をとって踊りたい真夜中で時間が止まってしまえばいいのに
眠りいるきみの温度を確かめるように握った右の手のひら
ぴったりとあなたの肩に頬よせて応答セヨっておどけてみせる
あなたとの境界線も曖昧で（進んでしまった乱視の目では）
どすこいとふざけてきみの右腕を掴んでみれば熱い筋肉
きみの手でひだりの耳を覆われてうたう心臓の音あたたか
境目はなくなればいい右腕の静かにうねる君の筋肉

天使の４歳児？

悠佳里

居酒屋の生け簀は小さな水族館通るたびのぞく「これは？」と名を聞く
ナポレオンフィッシュカワハギサンショウウオ呪文を唱える４歳の口
愛読書は恐竜図鑑と魚図鑑「深海生物図鑑もほしいの」
何だって１番がいいだって僕何でもできるしお兄ちゃんだし
やってみたいことがあふれてそれ以外やりたくないです「母ちゃんやって！」
湧きあがるイライラのはけ口としてどんどん増えてくおやつとご飯
子どもたちが子どもらしくあるその為の修行の身です大人の我ら
１７キロを抱っこするのはキツいけどもっと言ってよ「抱っこして」って

寝ころびながら

ゆりこ

読み聞かせしたぐりとぐらカステラのレシピの数だけある母の愛
どこまでもどんどこ進むももんちゃんおしりふりふりオムツが咲いて
目の前にケーキを近づけ見てみたいしろくまちゃんの大きなおくち
マスク越しのように読めない感情をそのくちびるに引くうさこちゃん
てぶくろはまだ見つからない祈る手に早く抱かせてあげたい子らを
ビロードのうさぎが見ている本当に大切なものを知る部屋のすみ
いつだってそっと出てゆくからだれも知らないサンタのひみつはひみつ
寝ころだそらまめくんのまねをして寝ころんだ子が旅立つ日まで

最高の人間

龍翔

ぼくたちはさう簡単にこはれない　もう園長は手遅れらしい
岐阜ぢゆうのクランベリーがいるだらうその大鍋でジャムを煮るには
さつきまでほほゑんでゐたナンシーが急な真顔で、逃げて、と言へり
ナンシーがこえ震はせて訴へる　脳に要らない部分などない！
ふだうといふ秋のちひさな爆弾を沼田は笑ひながらほほばる
ナンシーが切除したのは羞恥ではなくておそらく躊躇と思ふ
ナンシーがスイッチを押す　嗚呼、といふ男のこゑとともに暗転
ニツポンの社長が負けて　最高の人間までも負けて　ぼくらは

秋と雨と

廣珍堂

秋霖を今日も受けつつ佐保川に白鷺ひとつ誰を見をるや
ほつほつと水面の波紋見て君は薄き背中を丸くしてをり
薄暗き山の参道昇るとき雨の気配は木々より降りぬ
鄙びたる湯治場の窓に雨の来て共同炊事の米を磨ぎたり
鴨川のカップルの跡は温きまま小さき雨の降り来るかな
猿たちもまたたく雨に濡れてをり雲母坂より登る比叡に
あの雲は雨になるわと指指して子供と遊ぶ気象予報士
避難所へひとりふたりと集まりし高齢者には天気痛あり

メタバースデイ

笛地静恵

父みとり母をみとりて子のつとめ果たしおえたり庭の合歓木
淡々とＴｏｌｋｉｅｎをば読み進め六十七の峠を越える
数十の文庫手帳を積み重ねともあれ愛しともあれ書いた
人生へ感謝をこめた歌にするこれができなきゃ何をしていた？
あといくつ食えるだろうか十月の和栗のケーキフォークをいれる
「未来とは予測がつかぬ」日の本がこれほどまでにおちぶれるとは
いわし雲西へながれて金色の地球大気を深呼吸する
なにごとも終わりの好きな性格の最期の河が楽しみである

行方不明

福山桃歌

脆弱な恋の息の根止めてやる　きみの笑った顔だけが見たい
ひがんばな美しく咲くありふれた願いを赤い養分にして
離さないで　って言うからきつくきつく縛り上げたの　気づいてないね
くちづけで溶けてしまえば嘘つきも二枚の舌も許されるのに
きみ以外捨てて逃げられたら　なんてひとりよがりでゆるやかな自殺
しあわせになりたいくせに境界が分からなくなるのはこわい
飛びたいね、空って言ったきみの目はオニキス　世界の果てに揺れてる
何もかもきみから奪った　地獄ならおれだけ落ちる　だから　ゆるして

時々の表紙

まさけ

道徳の表紙についた赤いしみ　瓜は難なくわれてしまった
ジーザス！と放り投げたい日もあったジーニアスの折れシワを擦る
an・an の表紙と同じはずなのになんだか違う彼氏の体位
取説の表紙の裏の奥様のように笑顔になれなくて、冬
檸檬持つ笑顔の人よこの時も耐えていたのか　縊死の報聞く
隣家へと回す回覧板にある元の苗字をじっと見つめる
深秋の新潮文庫を読み終えて甘い葡萄を買いに出かける
華やかなおせち彩るチラシ取り浮かぶ父母実家の明かり

モノ・マガジン

六厩めれう

アイデアの中身は忘れひらめいた感覚だけを持ち越して、朝
「二十分お待たせします」を快諾し座れば五分で出るモーニング
高いよね、買わないねって言いたくてモノ・マガジンはみんな大好き
鳴る音はすべてを鳴らす主義らしい隣の席のおやじのスマホ
出張も旅行なのだな　幸せがあふれる列の最後へ並ぶ
バス停のばあさんこちらへ手を振って「乗らないよ」って意味だったのか
メニューよりかなり大きな炒飯に度肝抜かれる麒麟菜館
東京都北区赤羽てのひらに小鳥を乗せて歩く人あり

ぼくの机にはぼくの湖

村田一広

ガガガガガ　シャッターが車噛んでゐることはお構ひなしに降りゆく
夜行バスと知らずに乗り込んで眠る夕焼のやうな朝焼を見る
宅配便着いた翌日空き家には人影うごく影だけうごく
助手席は風雨でぐちやぐちやそれでも大急ぎで帰らねばならぬ
心臓が並んでゐます　本体は？　その時が来るまで泳がせる
じやがいもの皮をむいたらその実はさつまいも甘くいただいた
伸ばす手がショーケースをスルーして苺ショートをつかんでしまふ
デスクワークに飽きると飛び込んで泳ぐ机上の青く小さな湖

イーハトーヴの秋

森内詩紋

クルミの葉ばっさり散って灰色に胸苦しき日のイギリス海岸
嗚呼　風の又三郎は飛び去って二度と此処には戻りはしまい
俺もまた雁の捨て子だ　贖罪の果たしかたすら知らされないが
やわらかく夜を歪めて顔を出す月は大きなニッケルメタル
アオシシが俺の顔だけじっとみる　丘の上から憐れむ視線
手に余るほどの重さの黒葡萄　あまい　あまい　あまい　さびしい
ししおどり老いも幼も陽を浴びて　俺も誰かを楽しませたい
ほら探せ　金のどんぐり１つ落ち　イーハトーヴの秋は過ぎゆく

夢の国だしね

杜野詩季

やれるだけやったと思う今日はもう夢の国へと出かけていこう
誰にでも扉は開くはずなのに入国許可はなかなか下りず
王様を連れて行くから下々（しもじも）は抜かり無いよう準備万端
期待とはこういうことか到着の大歓声を少し呑み込む
パークデビューなんですわたし背に貼ったシールの意味をこの子は知らぬ
「そんなこといくら何でも無理じゃない？」「言ってみようよ夢の国だし」
王様は頭が冴えて眠れない夢の国には悪党もいた
ヒーローはそれでも握手をしてくれて醒めない夢を求めてしまう

歌詠の畑

御糸さち

本当にただ純粋に歌を詠むためにうまれたＡＩ「歌詠（うたよ）」
歌を詠むためにうまれたＡＩが歌を読み込む歌を詠むため
インプット足りなかりせば然もあらんアウトプットもあやうかりけり
歌詠ちゃん、と呼ばれ萌えキャラ扱いをされてもクリックで歌を詠む
歌詠には人の心は分からないからっぽの畑を掘り返す
詠んだ歌の評価はせずに求めずにからっぽの畑を掘り返す
二十四時間三百六十五日間からっぽの畑を掘り返す
荒らされているのか耕されているのか広い広い歌詠の畑

女海賊、〇Ｌになる

深影コトハ

秋晴れに宣戦布告をするごとく海賊旗（ジョリーロジャー）のような口紅
砲撃はいつも取り舵90度窓を背にした人より来たる
頼りない細剣（レイピア）　常に不景気の折れ線グラフで戦うなんて
人を縛るための鎖を踏み付けてデスクの下で鳴らすブーティ
消灯の時間すぎればオフィスから波打つ百万ドルの静けさ
褒められる仕事をすべて配り終え今すこしだけ濡れたい気分
海賊のウェディングドレスは赤色と聞いて選んだ生き方がある
オレンジのスカーフ風になびかせて骨まで笑うここが戦場

ミクロンと日曜日

水沼朔太郎

ミクロンと母が名付けたぬいぐるみ剛田はたまた袴田ミクロン
ミクロンで回顧するのはオミクロンではなく金村美玖の将来
午前中に食べるおやつがなまなましい金村美玖の承認欲求？
イヤホン・マスク・メガネで三種の神器だね金村美玖と三種の神器
バスタオル一枚突っ張り棒に掛け玄関の覗き穴を塞いだ
関心の延長線上　Ｅテレでソフトテニスを観る日曜日
昼寝した時間を散歩することにするきみとの日々をまだあるきたい
プロ野球のシーズンのよう復職の火曜日はじまりの一週間

色とりどりのモノクロ

水せ

消えることのない悲しみ歌わせてまぶたの裏に住む青色よ
オレンジの花を贈らせてください渡せるまで待ってほしかった
花嫁のあかしは知らぬままだけど幸福の種抱いて眠ろう
永遠になるの無邪気な笑みがいうまだ見つからないクローバーだ
停滞が振りつむような一日を過ごしています花が一輪
産まれた日祝えなくって苦しくて謝りたくて梔子を食む
チョコレートコスモスが咲く早すぎる触れられなくて心臓を裂く
目の前が暗くなってくばかりではなくて濁流色に飲まれる

色々考えてはいるんだよ

宮岡りょう

水色のボストンバッグと水色のバレエシューズで海へ行こうよ
夕焼けがオレンジだとは安直な　水色、グレー、黄緑でも可
紺とグレー　オフィスカジュアル決めてます　背中にメタルレッドのギター
この国も赤と緑に染まるころ椿の花はいじらしく咲く
あざやかな緑の電車が迫り来る　自殺防止の効果があるとか
ピンクでも私の好きなピンクとは薄らピンクじゃなくてヴィヴィッド
吾子が泣く　ピンクのキリンじゃなきゃやだ　動物園にはいたかもしれない
コーヒーはブラックじゃなきゃ飲まないって？ベージュばっかり着ているくせに

お賽銭ロボ

深山睦美

脳内で営業している居酒屋は全部潰してカフェにしなさい
新宿駅のベンチの裏に張りついたみんなのガムがおりなす星座
転職のＣＭに出る俳優は、なんと、転職したことがない
「おっぱいのかけそば」とだけつぶやいて静かになったあとすする蕎麦
普段からガスを吸わせて鍛えてる･･･このカナリアは、ガスじゃ死なねえ！
雀牌にキスするだけで盲牌ができたとされる謎の将軍
この街を冬にするのは、ああ、あの時に、君が燃やしたまっしろな息
お賽銭ロボ「賽銭を お前らの 代わりに入れて きてやるロボよ」

鈍器の錆

虫武一俊

軍需工場だったところに建つビルに通いつつ宇露情勢を見る
以前以後はっきりとした線を引くときの鈍器の錆の臭いよ
ダンボールを力まかせに折りたたむこの既視感に眠れずにいる
剥かれだすときにようやくみずみずと泣いてくる梨の真白い身体
夕焼けは暴君　美とはなんなのか万物に突き付けて突き付けている
模造刀で力まかせに斬られゆくような痛みと思うこの国
飲めば水はすとんと虚ろの内側を落ちてゆくんだ確かにここに
シンプルイズベスト　廊下を行くほどにしんしんと鳴る腰の鍵束

定型

六浦筆の助

詰めた型吹っ飛び扇の手が止まる　稽古不足の仕舞の舞台
定型の郵便で来るスキャンダル、文春砲の弾薬となる
床本（ゆかほん）に人生かけて「忠臣蔵」語れど語れど型見えぬまま
事故もなく「定型」終えて息をつく　今日も遅番なしの介護で
ファミコンも父親もない家でした「定型」求むバブル時代に
寝てる子を背負う男と吾を分かつ日暮れの動物園の秋風
婚活も希望の会社の就職も返事は定型「縁なかった」と
万博の大建築家の大屋根を抜く太陽の塔に憧れ